

## 会 議 録

|       |  |
|-------|--|
| 会議名   | 山形市総合教育会議  |
| 開催日時  | 令和5年2月3日（金） 9：00～10：30   |
| 開催場所  | 山形市役所3階 庁議室  |
| 出席者   | 佐藤孝弘市長、金沢智也教育長、<br>白鳥樹一郎教育委員、中村篤教育委員、熊坂香織教育委員、<br>細谷真紀子教育委員        |
| （陪席）  | 井上貴至副市長、畑口和久企画調整部長、<br>阿部宏企画調整部文化振興課計画推進総括主幹、<br>大山敬弘企画調整部スポーツ振興課長 |
| （事務局） | 高橋一実教育部長、細谷直樹学校教育課長、板垣裕子管理課長                                       |
| 協議事項  | 部活動の地域移行について   |

### 会議経過

1 開 会 （板垣裕子管理課長）

2 挨拶 佐藤市長・金沢教育長

3 協 議 （座長 佐藤市長）

「部活動の地域移行について」

パワーポイントを用い、細谷学校教育課長より説明。

<意見交換>

【佐藤市長】

それでは、部活動の地域移行についてご意見をいただきたい。

まず、私から意見を述べさせていただく。この件については、非常に色々な要素が絡み合っている課題であると思っている。例えば、学校経営の観点からすると、休日の部活動は、以前から課題である教員の働き方改革に関わりがある。

また、部活動に対する教員の意向や外部指導者の人材確保における地域格差、競技団体などの人材プールとなり得る組織の偏り、競技によるクラブチームの有無などがある。生徒のニーズとしても全国大会やプロを目指す生徒や楽しむことを目的としている生徒もいる。このように、非常に斑模様のような中で新しい形を取り上げていかなければならないため、一気にきれいな形で進めるようなことになる危険であり難しいと思う。

また、部活動の意義付け自体を最初の時点でしっかり共有しないと、議論が噛み合わない状態に進んでしまうことが危惧される。

部活動は任意での活動であるが、保護者からの視点や教育課程での体育がある一方で部活動があるという意義を共有した上で、関係者の中で意義を達成するにはどうすればいいかという点に遡れるような形で議論することが必要であると考え。そのような意義の共有を経て、できることからモデル事業のような形で実践を積み重ね、取り組みながら考えるというトライ&エラーを繰り返していく中で創り上げていくしかない考える。

また、スポーツの大会にクラブチームで参加できる仕組み等の全体的な部分も考慮しなければならないと思う。

最終的に、生徒にとって良い体験や学びにつながるように、山形市としても進めていきたい。

#### 【白鳥委員】

理想的な部活動の地域移行を行う上で9つの課題が考えられる。

1つ目は、教員の働き改革と地域で子どもを育てるという体制整備。

2つ目は、学校部活動における生徒指導の側面を活かした休日部活動の地域移行。

3つ目は、山形市内の生徒数は約6,500人いるが、モデル事業のアンケート結果で休日部活動を行いたいという生徒は5~6割いることから、約4,000人の生徒の受け皿が必要であること。

4つ目は、運動部16種目、文化部6種目のクラブ立ち上げ及び統括する運営本部の設立。

5つ目は、山形市内を4ブロックとした際、1ブロックの受入人数は約1,000人となることから体制整備が必要であること。

6つ目は、運営本部と各クラブの人材確保及び運営に係る予算の確保。

7つ目は、クラブ参加に必要な費用と送迎等の負担。

8つ目は、各種大会における学校部活動と地域クラブでの調整が必要。

9つ目は、学校部活動と地域クラブとの関係性。同じ種目でも指導者ごとに考え方が異なるため、地域移行した際の考え方の共有が難しいと思う。

以上の課題から地域移行を進めるにあたり、6つの方向性を持つことが大事だと考える。

1つ目は、準備のための事務局の立ち上げ及び人材や予算の確保。

2つ目は、事務局を中心に地域クラブの立ち上げに力を入れると共に全体の運営本部の立ち上げを進めていく。

3つ目は、地域移行に向けた体制づくりと並行して、土日の学校部活動の部活

動指導員を増員配置すること。

4つ目は、土日の部活動体制が地域や種目により様々な形が混在することを事前に共有し、関係者で共有認識を持ち、理想的な地域移行の在り方を見つけることが大切であること。

5つ目は、事務局や運営本部には人材や予算確保を進めて、各部活動の調整が求められる業務であること。

6つ目は、地域移行の道筋を明確に生徒や保護者に伝え、不公平感が生じないよう最終目標を提示しながら広く周知することが必要であること。

部活動の地域移行を進めるにあたって、以上のことを考えている。

### 【中村委員】

今回の協議事項である部活動の地域移行の問題と国の自衛隊防衛増強の問題は何か類似していると思う。

部活動は生徒の成長のためにスポーツ文化の体験を通して保障しているが、教育課程の延長にあって本来の教員の業務ではない。

自衛隊は国土や国民の安全を保障しているが、敵を攻撃すること自体は憲法に違反する。2つとも、共通して戦後の日本の中で大切な事として守られ、今後のあり方については課題となっていることも非常に似ていると思っている。

保護者の立場から子どもの部活動の様子を見てみると、親として応援したいという気持ちと、土日に部活動の指導をしている教員の方を思うと申し訳ないという気持ちがあり、両方の気持ちを抱いているのが現状である。

土日の部活動は、昭和から令和にかけて全て学校に任せていた現状があり、現在、部活動の地域移行を進める話があると誰もが違和感や抵抗感を抱いてしまうのは当然のように思う。

そのため、あくまで部活動の地域移行ということを目標とするのではなく、少子化による部活動維持の課題や教員の働き方改革を進める上で土日の負担を減らしていく、この2つを目標に掲げることが必要であり、その手段として部活動の地域移行があると捉えるべきだと考える。

目標達成に向けて、今後の土日の部活動の受け皿を学校から山形市内のどこかに移行しなくてはいけないということを検討する必要がある。

検討協議会を立ち上げ関係者との意見交換や詳細な確認等を経て進めていくと思うが、その上で保護者の費用負担や学校の教育現場との意思疎通、各種大会への参加方法、指導者の人材確保、困窮家庭の支援、段階的な移行による学校ごとの格差なども生じてしまうことなど、様々な予測できない問題がでてくることが考えられる。

何よりも、将来の子どもたちや働く教員の方のため、さらには、地方経済の活性化につながるビジネスチャンスの可能性も考えられる。ポジティブな考え方をしてほしい。

最後に、以前の総合教育会議で協議された「コミュニティ・スクール」と同様に、部活動を通じて地域社会との連携が深まっていくことを期待している。

### 【熊坂委員】

部活動の地域移行について考えていく度、生徒たちの教育のためであるべきことが生徒主体として感じられず、結果的に生徒たちのためにならないのではないかと心配や不安が大きくなっている。

私は現在も競技に携わっているが、その競技との出会いは中学校の部活動であった。

中学2～3年と全国大会を経験することができたが、部活動の内容にやり過ぎを感じたことはなかった。むしろ自分自身をもっと頑張りたいとコミュニティを広げ、先輩や後輩と声を掛け合いながらそれぞれの目標に向かって楽しく取り組んでいたと思う。

今回の説明を聞き、部活動が任意加入であることに驚いた。進路に影響がでるなど当時は中学校に入ったら部活動には入らなければいけない事と誤解をしていたのかと思っている。今後、中学校に入学する子どもたちや保護者には、部活動のあり方についての説明をより丁寧に誤解のないように行ってほしい。

他市町村の取り組みとしては、学校部活動以外の地域クラブに加入してもよいと言っているが、学校部活動には名前を登録しなければならないという。これは中体連に出場するためのルールなのか、部活動の登録については統一性がなく、曖昧なところがあると感じた。また、競技特性から中学校の部活動とひとつにするのは難しく、市町村を跨いで所属することも想定できる。

今後、まずは現状をしっかりと説明した上で、生徒たちのためになる解決策を少しずつ見つけていく必要があると思う。

現在、国際大会等でのメダル獲得や競技団体で行っている日常的継続的な強化活動、今後期待されるアスリートの発掘や育成のための強化活動などは増々低年齢化してきている。そのため、いつの間にか中学校の部活動も教育の観点よりも競技力向上の観点の方が大きくなってしまっていると感じている。

そのため、強豪校の実績に基づいた指導内容を必死にこなそうとする生徒の姿や中々練習を消化できないことに対して感情的になり、強い口調で指導される先生も見受けられる。また、子どもたちの姿を応援したくその姿を容認している保護者もいる。しかし、子どもたちの目標達成のためや県内の強化のためだからと本当にこの状況で良いのかと考えてしまう。

中学校の部活動は何のために行っているのかということを再確認しなければ、生徒たちの心も体も壊すことになる。是非、中学校の部活動ではそれぞれの目標や課題に取り組めるように、先生から生徒の一方方向のみならず、探求的な学習を取り入れてほしいと思っている。

私自身が現在指導している生徒は、支援学級に通っていたが中学校で駅伝と出会ったことで秀でたものが見つかり走ることは楽しいと部活動がその生徒にとって大きな変化となった。3月には高等部を卒業し、社会人になっても職場で走ることを続けさせていただいている。支援学級に通う生徒も部活動を通して、何かを始めるきっかけになると感じている。部活動の可能性をぜひ、引き出してほしい。

今後、行政主導のスポーツクラブが設置されることがあれば、部活動を移行することはスムーズかもしれないが、目的の形態も違うそれぞれの理念や方針がある外部団体に移行することに違和感を抱いている。

そのため、学校の部活動をしたい生徒に対しては、学校部活動は平日のみで土日は行わない。クラブで活動をしたい生徒に対しては、そのクラブ活動の日程調整を行い通う。また、学校部活動は行わず、習い事や塾、ボランティア活動をしたい生徒に対しての対応など、一人ひとりのニーズに応じて自由に選択できるようにするという方法を考えていくことも良いと思う。

これまで、学校では学校以外の活動は分からない、クラブでも運営方針に基づいているため学校のことは分かりませんと、中々お互いが歩み寄れずにいた。

しかし、今後は進路指導や部活動推薦もあるため学校とクラブが一緒に取り組んでいけるような仕組みも必要になってくると思う。

小学校や高校とも引き続き連携を密にしていきながら、今後は、コミュニティ・スクールのような様々な機関や関係団体との話を聞き、多くの視点から子どもたちを支えていただけると良いのではないかと感じている。

## 【細谷委員】

保護者及び民間として学校教育に関わった立場からの視点で意見を述べる。

部活動の地域移行について、結論として、現在の学校部活動の形のまま地域に移行することは難しいと考える。段階的に休日から地域移行に取り組む方向としているが、本質はこの教育施策に影響されることなく「部活動の地域移行」を的確に捉え、そもそも山形市がどんなビジョンで何のためにこの施策に取り組むのかという点が重要であると思う。

また、そのビジョンに向かって様々な関係団体が段階的に進める必要があると考える。他の先進例からもそれぞれにビジョンが備わっていると感じる。

私自身が考えるビジョンとしては、子どもたちの生涯にわたる心身の Well-being（ウェルビーイング）であると感じている。Well-being（ウェルビーイング）は、心身と社会的な健康を意味する概念であり、そのようなビジョンを叶える中で先生方の働き方改革や子育て家庭の公正的な支援、地域の文化・スポーツの振興等というミッションを実施していく必要がある。

この生涯にわたる Well-being（ウェルビーイング）は、いわゆるスポ根やスパルタと言われるような旧体制のスポーツ・文化的な学び等の指導方法ではない。

現在、全国的にスポーツ、文化振興団体やプロスポーツの中で取り入れられているような多様なエビデンスに基づいた指導方法が学校部活動として子どもたちに向けて実施されていけば、指導者が子どもたちの Well-being（ウェルビーイング）に対する認識、ここでいう認識は指導方法ではないが、その認識を一定の基準に揃えるような学びの場を創出することができるのではないかと感じる。これは競技スポーツの後退を誘引するものでもなく、子どもたちの文化・スポーツの夢を狭めるものでもなく、山形市の目指す健康医療都市としての未来の市民生活・まちづくりにも寄与し、質の高い文化・スポーツの経験が生涯にわたり子どもたち自身の社会生活の中で個々の望む形で役に立つ力になるのではないかと感じる。

これが、地域移行の本質となるべきであり、学校部活動の叶える部分であると認識する必要があると思う。

この社会生活で役立つ力について、学校部活動との相違は何かと考えた時に学校が教育の論理に立つ学習指導要領にある学校部活動の「生徒の自主性や自発的な参加による部活動」、「スポーツや文化に親しみを持つ」といった学習意欲や責任感、連帯感の両刀、学校教育が目指す資質能力の育成に資するものに立ち戻るものではないのかと思う。

本来、学校部活動が目指すものは競技や文化的技術の専門能力を育む場ではないということ、また、現在褒章を受けるような活動の実態はすでに外部の力に頼って叶えているという現状がある中で、重要なのは本質的に改革が必要な学校部活動の在り方という部分と専門的な技術向上を目指すスポーツ振興・文化振興、家庭への支援を同時に整理していくことにあると考える。

また、これを抜きに部活動の地域移行は進まないのではないかと感じている。

現在、学校部活動が担っている多岐にわたる学校部活動の種類、学校にある体育館や楽器、調理、理科、技術・家庭など様々な機器の資源や平日休日を問わずに面倒をみてくれるという先生の姿がある。

これを地域移行の際にそのまま叶えるには地域側からすると十分な予算もなく、施設整備も不足し、市内の地域団体や地域クラブ、競技団体から見れば本来の自らの目的とは逸するため、活動量が異なることで受けられる人材などが不足する課題が生じると考えられる。

一方で、現在地域移行されていると言っても過言ではない総合部活動部といわれる活動においては、生徒・家庭が対話の上での同じスポーツ文化活動の中でも自身の目的やレベルに沿った最適な活動を選択し、学校教員が関わることなく活動が既に持続している。スポーツの面から考えると中体連への参加も総合活動部の形で認められているため、顧問という形で先生方に与える負担はなくなるのではないかと感じている。

他市町村において関係団体に説明会などが実施されている中では、総合活動部をいったん白紙にして全ての生徒を学校部活動に戻し、実施させるという流れには若干違和感を持っている。

部活動の任意加入は、何もしなくていいということではないことは理解できるが、この選択肢を外部に与えないという部分が違和感に思う。

外部活動については、費用や時間という面で保護者が受容できる家庭にしか手の届かない活動であることが課題であると感じる。

地域移行の中で家庭の状況に左右されず、誰でもスポーツや文化振興に触れられること又は学校がその場につなぐことができる、スポーツや文化振興が主体の多様な種目、経験との出会いの創出やマッチングができる場づくりが必要なのだと感じる。

例えば、現在、市で主催しているスポーツフェスタや県のドリームキッズである。この知見を活かした市独自の機会を学校部活動に対して提供している場づくりである。

地域移行の中で学校部活動として力を注ぎたいと希望する教員の方は、自身の働き方改革として外部団体を立ち上げることへの研究の整備を進めることや褒賞実績や地域伝統をまとった学校部活動として地域に密着し、地域から手放せない活動を行っている場合にも学校が主体になるのではなくあくまでもそれを実施したい地域や保護者への外部団体の立ち上げを進め、それぞれの活動が持続可能な活動になるよう、それぞれで工夫していくことが重要であると思う。

学校部活動としては、外部活動も学校部活動の選択肢として認めながら、外部活動を求めない生徒に対し自主的・自発的な参加による部活動の新たな取り組みを行ってもいいのではないかなと思う。

例えば、先生の授業の延長線上にあり、大学のゼミ制のような活動をすることが先生方の研究活動にもそれぞれ結びつくのだと思う。

本来部活動は学校という場の学びの現場で様々な教科に対して子どもたちが抱いた興味関心を先生方の知見と安全管理の下、子どもたちが主体的に活動を考え、興味を伸ばしていく場であってほしいと感じている。

新たな取り組みは、先生方に限らず生涯スポーツ・文化として地域公民館等で活動している社会人の活動を取り入れることで高校生の探究活動のように子ど

もたちの活動の選択肢を増やす工夫をするのも手段のひとつではないかを感じる。

例えば、休日に社会人が関わり活動の目的を与え、社会人が関われない平日は子どもたちが目的のための計画を自主的に実施し、その安全管理やサポートを教員が行う等というイメージである。

この新たな学校部活動の取り組みは、競技志向、専門的技術の習得とは違う目的であり、中体連等の選手枠の獲得を外部部活動と学校のどちらで出場するかという移籍の課題や少子化で生徒数が少なくなる中で学校部活動の精選やスリム化が進まないという状況の解決策になるのではないかと思う。

地域移行については、その前の段階で工夫と改革が必要な部分が基礎として既にたくさん存在していると思う。子どもたちの生涯にわたる Well-being (ウェルビーイング) に資する教育活動として多様な選択肢を認め、子どもたちを第一に考えつつも三方良しだけでなく四方八方良しを目指すビジョンが必要であり、それを周知しビジョンを共有しながら実施していくことが地域移行に向けて必要であると感じている。

#### 【金沢教育長】

今年度、全国・東北・県における都市教育長会議に参加し、「部活動の地域移行」について、文部科学省の方からの説明、先進的な取組をしている各教育委員会の紹介等を聞いてきた。どの会議においても、進めるにあたって困っている様子があり、大きな話題となっていた。

特に話題になっているのが、都市部と市町村という地域の実情、各地域の持っている資源、部活動というスポーツの多様な種目、そのような実情を考えるとシステム的なものを構築し、制度的に行うということを一律で進めていくことはかなり難しいということ。ほぼ不可能であることを感じた。

市長より一気に進めることは心配だと話をいただいたが、私も同じくトライ&エラーをしながら、どういった形が正解なのか、進めていかなければならないと思う。

様々な会議の中で、全国各地の教育長と対談した際には、部活動というのは本来教員が担うべき業務ではない、という枠組みにあるが、今までの中学校の在り方として部活動はかなりのウェイトを占めているという実態があり、教員にとっても生徒にとっても、非常に重要度の高い改革であることを共通認識されていると感じた。

私自身の教員生活を振り返ってみると、部活動によって学校が成り立っていた時代も正直あった。それは中学校の大きな課題として生徒指導の問題があるということである。子どもたちが学校生活の中に目標とするものとして部活動があり、

そのことで目標のある生活を送っていた生徒が多く見られた。子どもたちは、持っている様々な可能性を秘めながらも、真っすぐに向かえない危険な部分も中学生の頃にはある。このような実態も踏まえて考えていかなくてはならないと、会議の中では話題となった。

部活動の地域移行の具体的な姿や正解が見えない中ではあるが、大きく3点についてお話しする。

大きい1点目は「部活動の地域移行の必要性」について、私なりの部活動の意義なども含めてお話しする。校長は部活動の顧問の職務について、主任や担任のような役職について命令できるものではなく、先生方の了解を得たうえでお願いしている。特に、部活動は教員の校務・職務に含まれていないことや部活動は時間外の活動が多くなることも理由のひとつにある。そういった必ず命令できる業務ではない中で、中学校の中での部活動の活動は非常に意義深いものとなっていることは、皆さんご存じかと思います。

部活動の意義についてもお話しすると、1つ目は、子どもたちにとって仲間と共に自主的・自発的な活動をすることが、多くの子どもたちに喜びや生きがいをもたらし、学校生活を豊かで充実したものにしていく。勉強だけではなく部活動をすることに楽しみを感じ学校に通っている生徒も少なくないと感じている。

2つ目は、学級や学年を超えた集団の中で、互いに高めあい励ましあい認めあいながら、自己の存在や責任を見つめ、豊かな人間性や社会性を育むものである。中学校時代の部活動についての話は、大人になってからも話題として出てくる。その人なりを知るひとつの材料であることも、部活動は人生の中での大きな足跡のひとつになっている。

3つ目は、努力する過程をとおして先生と生徒や生徒同士の人間関係・信頼関係が高まり、互いの理解を深める重要な場になっていること。同じ釜の飯を食うという言葉もあるが、そこでの苦しさの中で培ってきた経験が、大人になってからも社会での生活に活かされている生徒は多いと思っている。

こういったこともあり中学校では、学習指導・生徒指導・部活動という学校教育活動の3つの柱になっていると思っている。

また、地域移行の必要性を考えた時に、必ず検討を進めていかなければならない理由についても3つほどお話しすると、1つ目としては、学校の部活動では済まない状況になっていることである。全国レベルやメダリストを目指す生徒が多くなり、学校教員の負担が増加している。教員の志望者がいないという厳しい現状があり、10年後教員がますます減少し、教員不足の影響が大きくなるとすれば、本来学校が向かうべき文部科学省が示している教育の姿は絵に描いた餅で終わってしまうだろう。

2つ目は、少子化による部活動の減少、部活動の多種多様化である。学校のみ

では個のニーズにあった活動の実現は叶えられなくなっている現状がある。子どもたちの個性を生かすということが教育の中で重要であれば、今の方策としては部活動を学校だけで担うものではないものにしなければならないということだろう。

3つ目は、コミュニティ・スクールの設置と社会に開かれた学校への移行が進んでいるが、学校だけで子どもたちを抱えられる時代ではないということである。学校だけではなく地域・社会が子どもたちの人間性の育成に携わるひとつとして重要なものであると考える。

部活動の価値が非常に大きいものである中で、地域移行はこれからの中学校教育にとって進める必要があるということである。

また、伝えたいことの大きい2点目としては、部活動の地域移行のイメージと行政の役割である。部活動は平日学校で行うことであり、休日は子どもたちが塾や習いごとを行うようなものというような区別をすることが進めていく上で分かりやすいのではないか。移行期にすぐ区別してしまうと活動できない子どもたちが増えることも懸念されるため、しっかりと分けてしまのは制度が固まってからすべきである。行政側としては、制度を進める上での予算の確保や活動の場の調整が必要となってくる。

大きい3点目は、誰もが平等に活動できるように、保護者の負担軽減に努めることである。すべての生徒にとって平等になること、これは生徒や保護者、関係する方々にとってとても大切なことである。習いごととして整理をすることは「お金がかかる」ということだろう、先行自治体でもやはり活動費がかかっている。しかし、実際に部活動の地域移行になれば思った以上に費用がかかることも想定できる。週末の活動のための保護者による送迎や活動の活発化による遠征等の別料金も出てくるかもしれない。これまで山形市やスポーツ協会から様々な支援を受けて有意義に活動できているが、今後の展開では様々な課題が出てくるのではないかと思っている。

まだまだ先が見えない中で、これまでの経験や会議への参加をとおしての話をさせていただいた。最後に様々な教育長の会議で話題になっていることだが、市長部局と教育委員会内での連携についてである。他市では連携自体に課題を抱えているという声が出されている。山形市では、市長部局と一緒に進めていこうとしていると、堂々と話しをしている。重要度の高い教育改革であるため、市長部局や他団体と連携を密にして様々な分野から助言をいただきながら子どもたちのために進めていきたいと考えている。

### 【市長】

多岐にわたる課題が提示され、根本的な考え方が大事になってくる。個人的なことになるが、私はバドミントン部の一員として一生懸命活動していたことを思い出す。土日には、他の中学校の生徒と一緒に一般開放している体育館に任意で集合し、大人や高校生と試合をすることがあった。バドミントン競技は、個人プレーであるため、強い相手と試合をすることが、とても良い経験になったと思う。

そのような形で言うと個人競技はとても進めやすいと思った。試合の時の責任者や送迎の問題があると思うが、移動の電車代しかかからなかったことを思い出す。しかし、サッカーや野球といった団体競技のチームプレーはそのようにいかないと思うので、模索しながら進める必要がある。

これまでの意見にさらに何かご意見あればお願いしたい。

### 【金沢教育長】

運動部活動について多く話に挙げられるが、文化部の吹奏楽に係る地域移行はどのような形が可能なのか模索していかなければならないと考えている。一気に進めることなく、保護者の理解を得ながら進めていきたい。

### 【市長】

競技やジャンルによって多様な在り方が存在すると思う。そのようなことも含めてトライ&エラーで進めていくことが増々必要であると感じる。

### 【市長】

ほかに意見等はないか。

< 質疑応答 なし >

## 4 その他 (板垣管理課長)

来年度の総合教育会議の持ち方については、今年度同様、年2回の開催を考えている。第1回目については、8月頃を予定している。詳細については、協議して決定していきたい。

## 5 閉会 (板垣管理課長)